『栄花物語』に現われた仏教思想

蔵田敏明

序

『栄花物語』には『法華経』に関する記述が多い。『栄花物語』の成立が、正編（巻一「月の宴」から巻三十「つるのはやし」）は末法（一〇五二年）突入直前、続編（巻三十一「殿上の花見」から巻四十「紫野」）は、末法突入直後と考えられる。当時は、善根の数量が意味を持ち、自力往生を目指す浄土教の全盛期でもある。従って、罪の消滅に効果があったとされる『法華経』は貴族達に積極的に受け入れられた。『栄花物語』の主要人物である藤原道長もまた、『御堂関白記』『権記』『小右記』などをみてわかるように熱心な『法華経』信仰者であった。そのため藤原道長の『法華経』信仰に関する研究はよく見る。

また『栄花物語』においても松村博司[1]氏が「仏典の中で最も依拠する所の多いのは法華経であるが、これは同経が天台宗所依の根本経典として、当時最も弘通していたところから当然の現象である」と指摘され、その引用法について（A）経文の一部を引用したもの、（B）経文の語句を要約したもの、（C）経文の内容に拠るもの、と三つに分類

されている。

しかし、『栄花物語』において、『法華経』がいかなる意味を持っているかについては、あまり論究されていないようである。

かつて私は、『栄花物語』を創った思想の考察という立場から、「そらごと」拒否の問題について『三宝絵詞』の思想的影響を論じ、末法を直前に控えた『栄花物語』の作者（編者）が仏法を賛美し結縁することを目的とした物語を執筆しようとしたこと[②]、そして、その方法を『往生要集』の思想と叙述の仕方に見出した、ということ[③]を述べたことがある。

そこで本稿では、『栄花物語』を創った思想の考察という立場から、『栄花物語』にとって『法華経』が、いかなる意味を持っているのか私見を述べたい。

周知の如く『栄花物語』正編と続編は、成立、作者も異なり、同列に論じるには無理がある。正編に限ることとする。

一

『栄花物語』は、山中裕氏[④]のいわれるように「史実を正確に書き、編年体のなかに史実の流れを情緒深く書こうとしたもの」である。つまり、編年体で著した歴史事項を縦軸に、物語という色糸が絡み合い、まるで綴れ織りのように編まれている物語なのである。

そこで史実の記述の狭間に紛れるように据えられている物語に焦点をあてると、その特徴として共通のものが見出せる。その一つに親子の愛、親子の絆を主題としている話がある。今代表的な例をあげてみよう。

まず、藤原道長が権力を握る切っ掛けとなった事件である長徳の変では、次のような物語が挿入される。

はかなくて夜も明けぬれば、「今日こそは限」と誰〳〵もおぼすに、立ちのかんとも覚さず、御声も惜しませ給はず。「いかに〳〵、時なりぬ」とせめの、しるに、宮の御前、母北方、つととらへて、さらにゆるし奉らせ給はず。かゝる由を奏せさすれば、「几帳ごしに宮の御前をひき放ち奉れ」と宣旨頻れど、検非違使どもゝ人なれば、おはします屋にはえもいはぬ物共も上りたちて、塗籠をわりの、しるだにいみじきを、又「いかでか宮の御前の手をひきはなつ事はあらむ」と、いと恐しく思ひまはして、「身のいたづらにまかりなりて後は、いとびんなかるべし。とく〳〵」とせめ申せば、ずちなくて出でさせ給に、松君いみじう慕ひ聞え給へば、かしこくかまへて率てかくし奉りて、御車に柑子・たち花、かきほをゐる御ごき一ばかり御餌袋に入れて、中納言は筵張の車に乗り給。宮のおはしますをいとかたじけなく覚せど、宮の御前、母北方も続きたち給へれば、近う御車寄せて乗らせ給に、母北方やがて御腰を抱きて続きて乗らせ給へば、「母北方、帥の袖をつととらへて乗らむと侍」と奏せさすれば、「いとびんなき事也。ひき放ちて」とあれど、離れ給べきかた見えず。「たゞ山崎まで行かむ〳〵」とたゞ乗りに乗り給へば、如何はせん、ずちなくて御車引き出しつ。長徳二年四月廿四日なりけり。[5]

（巻五「浦〳〵の別」）

これは、花山法皇を射殺そうとした罪、詮子（一条天皇の母）を呪った罪、私事で大元帥法を行なった罪で、流罪に処せられた伊周と隆家兄弟が、母と妹である中宮定子と別れる場面である。ここで強調されるのは、子を思う母の行動と心情であり、それがいかに深いものであるかが生き生きと語られ、真に迫るものがある。特に母が、罪に問われるとわかっていながらも我が子と離れがたく、少しでも同乗しようとする描写はせつなく、単なる歴史の記述を逸脱した劇性をはらんでいる。また伊周にとっては、母との別れであると同時に、息子である松君との別れの場面でもあり、二世代にわたる親子の別離が凝縮された筆致によって巧妙に描かれている。

三

四

次の例は、道長が宗教者でありながら、愛する子顕信の、突如の出家に嘆き慌てる場面である。

殿の御前「さてもいかに思ひ立ちし事ぞ。何事の憂かりしぞ。我をつらしと思ふ事やありし。官爵の心もとなく覚えしか。又いかでかと思ひかけたりし女の事やありし。異事は知らず、世にあらん限は、何事をか見捨てゝはあらんと思ふに、心憂く。かく母をも我をも思はで、かゝる事」と宣ひ続けて泣かせ給へば、いと心慌しげにおぼして、我もうち泣き給て、「さらに何事をか思ふ給へむ。たゞ稚く侍し折より、いかでと思ひ侍りしに、さやうにもおぼしめしかけぬ事を、かくと申さんもいと恥しう侍りし程に、かうまでしなさせ給ひにしかば、我にもあらでありき侍りしなり。誰にも〳〵、中〳〵かくてこそ、仕うまつる心ざしも侍らめ」と申給。

（巻十「ひかげのかづら」）

ここでの道長は、巻九「いはかげ」までの御嶽精進、法華三十講などを行う熱心な仏道修行者の姿ではない。どうして出家をしたのか、何かつらいことがあったのか、原因は、親である私にあるのか、出世のことか、それとも女性のことかと問いつめる姿は俗的で、前面に出ているのは、子を思う親の姿のみである。ここにおいても、歴史上重要な事柄とも思えない個人の出家を特筆し、親の情愛を描いている。明らかに、歴史の流れとは間断するかたちで、まことしやかな描写を挟んでいる。しかもその挿話に見える特性は、劇的なまでに深遠な親の情愛である。

次の例は、道長の子頼通が、物の怪に取り憑かれ危篤状態に陥った場面である。

いと〳〵ゆゝしう見え給へば、たゞ御顔に顔を当てゝ、涙を流しておはしますに、との、御前、「こゝらの年頃仕うまつりつる法花経助けさせ給へ。この世界に道弘めさせ給ふ事、多くは某が仕うまつれる事なり。この折だ

に験をえ奉らずなり、御恩を蒙らでは、何時をか期せん」との給ひ続けさせ給て、泣く〳〵寿量品を読ませ給に、大将殿うちみじろき給て、うちあざ笑はせ給ふ。殿いよ〳〵涙を流して読み入りておはします。御前近く候ふ女房の、日頃かゝる事もなかりつるにぞ、御物ゝけ移りぬる。いとけ高くやむごとなき御有様にて、いみじく泣く。

（巻十二「たまのむらぎく」）

この挿話がある巻は、三条天皇譲位と後一条天皇即位の記述があり、政治の流れとしては非常に重要な位置にある。にもかかわらず、このあたりの政治事情については全く触れず、頼通病悩に関わる記述に相当量の紙数を割いている。ここにおいても強調されるのは、父道長と母倫子の、子頼通を思う情愛が迫真の表現でもって繰り返し描かれている点である。

こういった親が子を思う物語を『栄花物語』は実に巧みに挿入する。他に、巻二十六「楚王の夢」で、娘嬉子の死によって山に住もうとする道長の話、巻二十七「ころものたま」で、娘の死を契機に出家する公任の話などが注目される。ではなぜ『源氏物語』のように男女の恋愛物語ではなく、親が子を思う物語なのであろうか。

二

周知のごとく、『法華経』には多くの比喩が説かれており、なかでも法華七喩と称される代表的な比喩がある。この中の「譬喩品」の三車火宅喩、「信解品」の長者窮子喩、そして道長が頼通の病気平癒のために読んだ「如来寿量品」にある良医病子喩の三つの比喩は、親の子に対する情愛の深さを語ることによって、仏の衆生に対する慈悲を表現しているものである。

六

三車火宅の比喩は、猛火に包まれているにもかかわらず、家の中で遊びに夢中になっている子どもたちを救うために、父親が方便を用いて救出する話である。長者窮子の比喩は、流浪して貧窮のなかにある息子を、巨万の富を築いて成功をおさめていた父親が探し出し、恐れをなす子に対し、父であると身を明かさずに見守り、そして励まし、終いには自分の財産を子に与える話である。そして良医病子の比喩は、毒薬を飲んで苦しんでいる子どもたちを助けようと、知恵のある医者である父親が、方便を用いて子に良薬を飲ませる話である。

そもそも比喩は、劇性（文学性）を内包している。この比喩の劇性は、当然『栄花物語』正編の作者（編者）にとって、見逃すことのできない切実な意味を持っていた。

特に「寿量品」にある次のような箇所である。

父作是念。此子可愍。為毒所中。心皆顛倒。雖見我喜。求策救療。如是好薬。而不肯服。我今当設方便。令服此薬。即作是言。汝等当知。我今衰老。死時已至。是好良薬。今留在此。汝可取服。勿憂不差。作是教已。復至他国。遣使還告。汝父已死。是時諸子。聞父背喪。心大憂悩。而作是念。若父在者。慈愍我等。能見救護。今者捨我。遠喪他国。自惟孤露。無復恃怙。常懐悲感。心逐醒悟。乃知此薬。色香味美。即取服之。毒病皆癒⑥。

（下巻　二四～二八頁　傍線は筆者）

父の方便によって、毒の回りの浅い子どもはすぐに薬を飲んだが、毒が効いてしまっている子どもたちは、父のいうことを疑い、薬を飲もうとしない。そこで父は身を隠し、他国で亡くなったと偽り、子どもたちは深い悲しみに目を覚まし、そして薬を口にした。父の愛がなす方便に、子どもたちの命は救われたという部分である。

ここに表現されている劇性（文学性）は、「方便」としての父の死を子が「悲感（かなしみ）を懐」くことによっ

て「醒悟（めざめ）」る点にある。つまり、親と子という深い絆、親と子の情愛が劇性（文学性）を獲得することによって、宗教へと昇華しているのである。作者はここに、『法華経』と文学の結合をみたのである。

三

『法華経』と文学を繋ぐものとしては、勧学会が有名である。『栄花物語』作者（編者）が、勧学会を意識していたことは、巻十五「うたがひ」において、道長の邸に集まった僧侶や公卿たちを、『三宝絵詞』の「比叡坂本勧学会」の箇所を文飾として用いて、次のように述べていることからもわかる。

月の夜、花の朝には、物の音を吹き合せ調べ、殿ばら僧だち、経の中の心を歌に詠み、文に作らせ給ふ。あるは「百千万劫の菩薩の種、八十三年の功徳の林」、又、「願はくは今生世俗文字の業、狂言綺語の誤をもて、かへして当来世〻讃仏乗の因、転法輪の縁とせん」など、誦し給ふも尊く面白し。まいて御戒受あまた度になりぬれば、御衣の袖に一乗の珠をかけて、御けしきども明かになりまさる。皆経の心を詠ませ給ふに、四条大納言の御歌の、中に世に伝り興を留めたり。寿量品の常在霊鷲山を、

出で入ると人は見れども世と共に鷲の峯なる月はのどけし」又、普門品、

世を救ふ中には誰か入らざらん普き門を人しさゝねば」。これを集りて誦し給も、げにと聞えたり。さても同じ心一筋なればかゝず。

（巻十五「うたがひ」）

七

また、『栄花物語』には、この記述の少し後に、『三宝絵詞』を資料として、道長の参加した一年間の仏事が簡略に記述してある。しかし、作者（編者）は、勧学会をこの中には入れず、道長がこの世に法華経を弘めたことを強調した内容と結び合わせて詳述している。なぜなら、法華経と文学を繋ぐ勧学会の思想は、『栄花物語』の作者（編者）にとって、多くの仏教年中行事の中で特別であり重要であったからである。いいかえれば、作者（編者）がいかに文学における「狂言綺語」の問題を意識していたかが窺える。従って、まずそういった思想の基となる白居易の「願はくは今生世俗文字の業、狂言綺語の誤をもて、かへして当来世〻讃仏乗の因、転法輪の縁とせん」という詩句は当然提示し、それに倣って実践した藤原公任の釈教歌を次に載せ、最後に作者（編者）自身も「げに」と同意するというものになっている。

いうまでもなく、文芸は仏教でいう三業のうちのひとつであるところの口業にあたる。口業には妄語・両舌・悪口・綺語の四つがある。虚構であることと巧みに言葉を飾ることが最も基本的手段である以上、妄語と綺語の罪を免れない。勧学会の中心メンバーであった慶滋保胤は、「勧学院仏名廻文」の詩序で、次のように述べている。

況復春苑鳴レ硯、以レ花称レ雪、秋籬染レ筆、仮レ菊号レ金。妄語之咎難レ逃、綺語之過何避[7]。

花を雪に喩え、黄菊を黄金と号しているのが問題であるという。オーバーな表現が罪を作るというのである。しかし、同じ勧学会のメンバーであった源為憲が書いた『三宝絵詞』の序文をみてみると、物語批判の部分で、物語の多さを「おほあらきのもりの草よりもしげく、ありそみのはまのまさごよりも多かれど[8]」と、非常に誇張した比喩表現になっている。もちろん『三宝絵詞』は仏教説話集であり、為憲がこれを記したことは、善根にこそなるものの、罪になるはずがない。比喩による誇張も目的が仏教と関わっていれば、別に問題はないのである。

また、『法華経』「安楽行品」には

不親近。諸外道。梵志。尼犍子等。及造世俗文筆。讃詠外書。及路伽耶陀。逆路伽耶陀者。（中巻　二四四頁）

とあり、文芸は否定されている。

しかし一方で、「方便品」を見ると、

乃至童子戯。聚沙為仏塔。如是諸人等。皆已成仏道。（上巻　一一四頁）

乃至童子戯。若草木及筆。或以指爪甲。而書作仏像。如是諸人等。漸漸積功徳。具足大悲心。皆已成仏道。（上巻　一一四頁）

とあるように、たとえ戯れや遊びであっても、仏教と結びついていれば、それは功徳になると解釈できる。それを作者側からみた時どうなるか。仏教とどういう形であれ関わっていれば、文芸という罪ある行為であっても功徳になると考えることができたのである。

つまり、勧学会の有様を詳述している作者からみると、『法華経』の比喩と「方便品」の記述は重要な意味を持っていた。テーマや設定が仏教と関わることは無論のこと、内容が似ていたり、文飾として仏教語を使用したりしているだけでも、功徳となるということである。

ちなみに、「方便品」のたとえ戯れであっても功徳となる例は、保胤、為憲も注目している。保胤は、「五言暮秋勧学会於二禅林寺一聴レ講二法華経一同賦三聚レ沙為二仏塔一」という詩賦を詠み、為憲は『三宝絵詞』の僧宝九「石塔」に、[9]

九

「乃至童子のたはぶれに、いさごをあつめて仏の塔となししは、みなすでに仏になりにき」と載せている。

また『三宝絵詞』「法花寺の花厳会」の中に、

（前略）比丘尼のいはく、『我れ昔の世を思ひみれば、いさめる女となれりき。たはぶれに、くさぐさのきぬをきかへつつ、こゑをかへことばをかへて人々のさまをまなびしに、尼の衣をきて尼のまねをしき。此の事功徳になりにければ、迦葉仏の時にあひて人に生れて尼となれりき、その時にたうときゆかりをたのみておごれる思ひをなし、あしき心をおこして思ひき。罪をつくり戒をやぶる事多かりしかば、地獄に落ちにき。しばらくをもき苦びをばうけしを、とく人の道に生れにたり。昔の善根によりて今釈迦如来にあひたてまつりて、つひになほ尼となりて羅漢の位をえたり。是れを思ひて、「たとひ戒をやぶるといふとも、とく道をうけつれば、なを尼の形となれ」とすすむるなり』といひき」。（一三七頁）

という箇所がある。この箇所は源為憲にとって重要であったのか、総序にも、

ただ一日一夜の出家の功徳、諸の事の中に比ひ無し、仏界みな喜び給ひ、魔軍は悉く振ふ。生死の海の船・涅槃の山の粮なり、と讃め給へり。茲れに因りて、波羅門暫しの程酔ひて僧の形に成りしかば、此の故に後に法を聞き、蓮花色が戯れに尼の衣を服けるは、其の力に今に仏に遇ひ奉れり。酔ひの迷ひ・戯れの衣に成りしだに善根遂に空しからざりければ、賢き心・実の志しなるは功徳いよいよ量り難し。（四頁）

と強調されている。ここにもたとえ戯れごとの真似をしたもの、表面的なものであっても、仏教と関わっていれば善

根となり功徳となるという考え方が示されている。やはり文学者にとって仏教との関係は重要であったのである。しかし、この考え方は、あくまで、文芸が仏教に支配された関係になる。それは、文芸の論理より仏教の論理の優先を意味することでもあり、文芸が仏教の実践の為の道具となっているともいえる。

四

『栄花物語』作者（編者）は、『法華経』の「譬喩品」の三車火宅喩と「信解品」の長者窮子喩を次のように、文飾として使う。

さても花山院は三界の火宅を出でさせ給て、四衢道のなかの露地におはしまし歩ませ給ひつらん御足の裏には千輻輪の文おはしまして、御足の跡にはいろ〳〵の蓮開け、御位上品上生にのぼらせ給はむは知らず、この世には九重の宮のうちの燈火消えて、たのみ仕うまつる男女は暗きよに惑ひ、あはれに悲しくなん。

（巻二「花山たづぬる中納言」　傍線は筆者）

かの信解品の窮子のやうなる召し集めては、「今各などにぞ給はすべき。まめに仕ふまつるべし」など、召し仰せらるゝも、さま〴〵めでたし。

（巻十八「たまのうてな」　傍線は筆者）

しかし、親の子に対する情愛の深さを比喩として使用した三つのうち、「如来寿量品」にある良医病子喩だけが、文飾として使用されていない。なぜであろうか。

一一

そこで、先に例として挙げた、巻十二「たまのむらぎく」の頼通が、物の怪に取り憑かれた場面に立ち戻ってみると、それが、いかに『法華経』「如来寿量品」を意識していたかわかる。この話は、三条天皇の娘と頼通の縁談が持ち上がったことに端を発して、頼通が重病に陥る。さまざまの物の怪や貴船明神などが出現するもなかなか解決しない。そこで、とうとう父親である道長自らが、『法華経』の「寿量品」を読みその効験を願う。すると頼通の妻である隆姫の父親、具平親王の物の怪が登場する。具平親王は慶滋保胤を師とする熱心な法華経信仰者である。その親王が、娘可愛さに、物の怪となって頼通を危篤状態に陥らせるのである。道長は親が子を思う真実にめざめ、頼通の結婚話を破談にする約束をする。

道長側からは、父の愛が、『法華経』の力によって子の命を救う。具平親王の側からみると、父の愛が、『法華経』の力によって道長に「真実の心」を目覚めさせ、子（隆姫）を救うということになる。作品中で道長が読むのが「寿量品」でなければならないのは、「寿量品」にある、父の愛がなす方便に毒を飲んだ病気の子が救われるということを連想させるからである。つまり作者は、そのことによって仏教的物語の世界を獲得することができたのである。

いうまでもなく、王朝時代は、察することのできる力が必要とされ、評価された時代である。例えば『枕草子』の四十二段[10]をみてみる。

小一条済時の小白河邸で行われる法華八講の見聞を記したものであるが、講義が始まり、清少納言が講師の話を少し聞いて中座しようとするのを、殿上人たちが口うるさく非難する。その中で、ただひとり藤原義懐だけが、「やや、まかりぬるもよし」といって笑う。それに対抗して清少納言は「五千の中にいらせたまはぬやうもあらじ」と言い返したとある。義懐も清少納言も、『法華経』「方便品」の内容を知って、お互いにそれを察しての会話だったのである。つまり、「方便品」に「是如増上慢人退亦佳」とあり、義懐は、「釈迦が法を説こうとしたとき、五千人の増上慢が席を立って退いた。しかし釈迦は、それを制止しなかった」ということを踏まえて、清少納言に「退出するのもよい」

といったのである。清少納言を増上慢と同じだと非難したわけである。それに対して、清少納言は「自分を釈迦に喩えるあなたこそ五千人の中に入る側、つまり増上慢でしょう」と言い返したという。法華八講という舞台だからこそ、『法華経』の文句で応対していることもまたおもしろい。しかし、どこにも『法華経』の文字は出てこない。察する力がいかに重要であったかがわかる。

こういった時代であるので、道長がなぜ「寿量品」を読んだかは、当時の知識人は察することができたのではなかろうか。

三つの比喩の中、二つは文飾として、一つは、「良医病子」という連想から、道長が『法華経』「寿量品」を読んで子を病から救うという物語を創り上げたのであろう。

結

『栄花物語』作者（編者）にとって『法華経』は、文芸と仏教を繋ぐものとして重要な意味を持っていた。その一つに、『法華経』の親の子に対する情愛の深さを語ることによって、仏の慈悲を表現していた「譬喩品」の三車火宅喩、「信解品」の長者窮子喩、「如来寿量品」の良医病子品の比喩があったことを述べてきた。

当時の時代状況について、多屋頼俊[11]氏の指摘がある。

「功徳を積む」という事に立脚して考えるならば、法華経を読誦したり、書写したり、解説したりする事に依って与えられる功徳は計るべからざるものであろう。しかし凡夫の罪障もまた計るべからざるものである。計るべからざる功徳と計るべからざる罪障とを差し引きしたら、黒字が出るか赤字が出るか、それは閻羅王庁で精算し

てもらわなければ分からない。これでは安心立命はできる筈はないであろう。これは法華経の場合だけでなく、弥陀仏名を称する場合も同様である。

安心立命できない状況にあって、罪得る文学は、仏教のルールを踏まえて、仏教と手を結ぶことが重要であった。従って、末法当来を直前に控えた『栄花物語』正編作者（編者）は、文学の考え方よりも仏教の論理を優先させた。そこに普通に文学作品として読むとさまざまな矛盾や不統一が起こった。例えば、巻十五「うたがひ」では、釈迦になぞらえられた道長であるゆえに、出家に際して上品上生が約束される。それにもかかわらず、巻三十「つるのはやし」では下品下生にしか往生できない。しかしこれも、「下品といふとも足むぬべし」と詠んだ保胤の考え方[12]や、極楽の位を問題にしない『往生要集』の立場[13]を、道長個人の一貫性より優先させた結果である。言い換えれば、藤原道長という中心人物を、仏教の論理に従って、釈迦になぞらえたり、凡夫にしたりしているのである。これは、道長だけでなく、花山天皇や円融天皇など、脇の人物にもいえる。

さらに釈迦が悟りを開いて間もないけれども数多くの弟子が出来たことが書かれた『法華経』の巻十五「従地涌出品」と、道長が出家してからまだそれほど経たないにもかかわらず、種々行った仏事が数え切れないことを述べた『栄花物語』巻十五「うたがひ」との内容を呼応させる。十五と十五の数字を合致させるため、編年体を無視するということまで行う。明らかに、登場人物や歴史の流れより、仏教の論理が優先されているのである。それは、この物語が、作者や読者にとって、仏教的には実践躬行であるということである。

『栄花物語』作者（編者）は、仏法を賛美し結縁することを目的とした物語を執筆しようとした。そしてその方法を『往生要集』とともに、『法華経』にもその思想と叙述の仕方を見出していたのである。

注

① 『栄花物語の研究』（刀江書院　昭和31年）二九九頁～三〇一頁。但し、旧漢字は新漢字に改めた。
② 拙稿「『栄花物語』の思想――『三宝絵詞』との関係をめぐって――」（「愛知女子短期大学国語国文」平成5年3月）
③ 拙稿「『栄花物語』の思想――『往生要集』との関係をめぐって――」（「文芸論叢」平成5年11月）
④ 歴史物語講座第二巻『栄花物語』（風間書房　平成9年）五頁
⑤ 日本古典文学大系（岩波書店）使用。但し旧漢字は新漢字に改めた。以下の引用も同じ。
⑥ 岩波文庫使用。但し旧漢字は新漢字に改めた。以下の引用も同じ。
⑦ 新古典文学大系二十七『本朝文粋』巻第十三（岩波書店）三五一頁
⑧ 東洋文庫（平凡社）使用。以下の引用も同じ。
⑨ 新古典文学大系二十七『本朝文粋』巻第十（岩波書店）二九三頁
⑩ 日本古典文学全集（小学館）使用。
⑪ 『多屋頼俊著作集』第五巻（法蔵館　平成4年）四一四頁
⑫ 『栄花物語』第十八「たまのうてな」で、尼が「十方仏土の中には西方をもて望とす。九品蓮台の間には、下品といふとも足むぬべし」と保胤の詩をとりあげて賛美している。
⑬ 大文第十第二参照